２０２３年（令和５年）　８月２０日　日曜日

デーリー東北　１２面　掲載

第105回全国高校野球選手権大会

「強打の光星」不完全燃焼

8安打もつながり欠く　長打、適時打なし

全国の強豪が集う甲子園でも、大会屈指の強力打線を誇る八学光星。だが、準々決勝では長打力や決定力は鳴りを潜め、内野ゴロの間の2得点にとどまった。8安打を放ちながらも、つながりを欠いた攻撃を「打線が（一線に）ならなかった」と表現した中澤恒貴主将。自身もノーヒットと不本意な成績に終わった。

チームが掲げる「脱一発」の変化球の見極め」を徹底できず、攻撃は淡泊だった。土浦日大の先発は伊藤彩斗。球の出どころが見えにくい投球フォームから繰り出される変化球に苦しめられた。中澤主将が「変化球と直球の配球が良くて読めなかった」と話すように、狙い球を絞れなかった。

3点を追う四回。四球と藤原天斗の左前打などで無死一、三塁とし、新城雄麻の遊ゴロの間に1点を返すと、土浦日大は背番号1の藤本士生に継投。想定以上に速いチェンジアップやクイックモーションに打者はタイミングを狂わされた。

連打は出なかった。1死一、三塁で打席には主砲の中澤主将。遊ゴロの間に三塁走者が生還したものの、自慢の攻撃をみかける攻撃を展開できなかった。

安打は全て単打で長打はゼロ。1安打の勝原は「相手投手に当たりもあったけど、スタンドまで運べなかったのは今の自分の実力」と下を向いた。

4強入りはならなかったが、今春の東北大会では仙台育英（宮城）を破って優勝し、甲子園でも強力打線を全国に知らしめた。

は「試合に出た2年生」3人が中心になって、悔しい思いをしないように、この経験を生かしてほしい」と涙で訴えた。間もなく発足する新チームに、「強打の光星」の進化を託した。（磯野雄大郎）

焦点

【土浦日大―八学光星】5回八学光星1死一、三塁、中澤恒貴主将の内野ゴロの間に三塁走者が生還、2―3とする＝甲子園

夏の甲子園

大会第12日

全国高校野球選手権大会は13日、甲子園球場で準々決勝が行われ、青森県代表の八学光星は2―9で土浦日大（茨城）に敗れた。前回大会覇者の仙台育英（宮城）、慶応（神奈川）、八学光星は三回、先発の池田陽佑を攻めて3点の先制を許した。継投した岡本琉翔は八回に大崎尚孝に7―2と逆転勝ち。1920年大会以来103年ぶりの4強入りを果たした。

神村学園（鹿児島）、土浦日大が21日の準決勝へ進んだ。

仙台育英は主将の笹東（岩手）に9―4で快勝し史上7校目の2連覇へ前進した。慶応は六回に6点を奪い、仙台育英と神村学園、慶応と土浦日大が対戦する。

神村学園は今回の5点で均衡を破っておかやま山陽（岡山）を6―0で退け、初めて準決勝に進出した。

準決勝は仙台育英と神村学園、慶応と土浦日大が対戦する。

土浦日大（茨城）

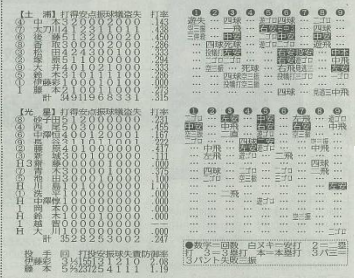
003 005 001 | 9
000 110 000 | 2

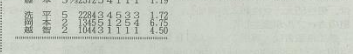
八戸学院光星

（土）伊藤彩、藤本一塚原
（光）洗平、岡本、越智一藤原
▷本塁打　松田2号①（越智）
▷三塁打　太刀川（3）、後藤2（5）▷失策　太刀川、中澤恒、長谷▷暴投　藤本
▷試合時間　2時間18分

【評】八学光星は投手陣が11安打、8四死球を許して打ち崩された。先発の洗平は三回、3四死球でピンチを招き、2本の適時打で3点を先制された。救援した岡本は六回、スクイズで1失点。さらに2死満塁から走者一掃の三塁打と適時打を立て続けに浴び、この回にも点を奪われた。3番手の越智も九回にソロを被弾した。

打線は8安打を放つも適時打はゼロ。相手投手陣の伊藤、藤本に要所を締められた。四回に新城、五回に中澤恒の内野ゴロの間に1点ずつ返すにとどまり、好機を生かし切れなかった。





【土浦日大―八学光星】9回に代打で出場し、ニゴロに倒れた八学光星の大川駿海

【土浦日大―八学光星】八学光星の齋藤琉偉は8回に代打で登場、四球で出塁する

憧れの舞台「楽しかった」

弘前出身の齋藤と大川 代打で甲子園初打席

○…八学光星のベンチ入りメンバーのうち、青森県出身者は齋藤琉偉（弘前東中出）の2人。追い上げを図る終盤に、そろって代打で出場した。共にヒット は出なかったが、目標だった甲子園で3年間の思いをぶつけるスイングを見せた。

齋藤は八回に登場。3球目の直球を狙うもファウルとなり、「フルスイングはできたが捉え切れなかった。それでも最後は粘って四球を選び、チームのために出塁したかったので良かった」と振り返った。

大川の出番は九回。この夏、青森大会から数えても初の打席に入った。「初球から行こうと決めていた」との言葉通り、直球を迷わず強振。二ゴロに終わったが、「思い切りやったので悔いはない」と言い切った。

「甲子園に出たい」「高いレベルで野球がしたい」と八学光星の門をたたいた2人。厳しい競争の中、「地元出身同士で頑張ろう」と互いに高め合ってきた。「ここが一番楽しかった」。憧れの舞台に立ち、共に充実感をにじませた。

中澤恒と鈴木 出塁かなわず

昨秋主力2人、代打で出場

○…八学光星は中盤以降、5人を代打起用した。昨秋の青森県大会で主力を張った2人も出場したが、流れを変えられなかった。

昨秋は1番に座った副キャプテンの中澤恒太。五回に洗平比呂の代打で出場し、狙い球の直球に反応したが、「力んでしまった」と結果は遊ゴロ。「先頭だったので絶対に塁へ出たかったが…」と唇をかんだ。

4番打者だった鈴木崇は、春に負ったけがを乗り越えてメンバー入り。七回に登場して三振に倒れたが、「小学生の頃から憧れていた甲子園で、自分のやってきたことは出せた」と、すがすがしい表情を見せた。

砂子田2安打で存在感

「春に絶対帰ってくる」

【土浦日大―八学光星】5回八学光星1死、砂子田陽士が中前に安打を放つ

○…3年生主体の八学光星にあって、不動の1番打者を務める2年生の砂子田陽士。この日も5安打とリードオフマンとして存在感を示したが、試合後は「結果的に」流れを持ってくることができなかった」と反省ばかりが口を突いた。

三回の第2打席で低めの球を左前に運ぶと、2死にバントの構えから初球を中前にはじき返した。

中軸の守備でも持ち味を発揮。九回2死一塁の場面で、左中間への鋭い打球を夕イビングキャッチした。「絶対に1点を渡したくなかった。死に物狂いで捕りにいった」と、魂のプレーでチームを鼓舞した。

2年生の野手で唯一のメンバー入り。新チームでも中心選手としての役割が期待される。「今の負けは無駄にしない」と力を込め、「これまで以上に意識を高く持ち、春に絶対に帰ってくると来春のセンバツを目指した。

デーリー東北新聞社提供